

# ニットのまち 外へ開け



## 新潟・五泉



工場見学会で、襟をつける作業について説明を聞く見学者＝新潟県五泉市のニットメーカー「ナック」

## 工場ツアー・イタリアの業者と連携

ニットや絹織物などの繊維産業が集積する新潟県五泉市。アパレル企業からの受注が減り、苦境が続く地場産業が生き残りをかけて動き出した。産地の技術力を消費者に直接アピールしたり、イタリアの同業者と提携したりと、素材メーカーの枠を超えた活動に活路を見いだそうとしている。

⑩ デジタル版に動画

「ニットの日」の2月10日。ニット工場の見学会が五泉市で開かれた。新潟市や東京などから参加した約50人が、巨大な染色用の容器、縮みを防ぐために生地を洗う巨大な洗濯機や、大勢の職人が黙々と進める縫製作業などを見て回った。

ふだんは見られない製造工程を見てもらい、ニットの魅力を知ってもらおうと、五泉ニット工業協同組合の青年部を中心に初めて企画した。「見ていて1着はしくなった」。参加者からはそんな声も出た。

2月に開かれた「五泉ニットフェス」の目玉イベントで、同じ県内の金属加工業の集積地、燕三条地区が2013年に始めた「工場の祭典」をお手本にした。町工場を市民に開放する

「工場の祭典」では、訪れた若者が刃物工場に弟子入りする「成果」も出ていて、ニットフェス実行委員

発発  
地域業  
地企

長の高橋慶至さん（高橋ニット常務）は大いに刺激を受けた。「手作業が多く、人材育成に時間がかかるのはニットも同じ。未来の人材を確保するには、ものづくりの素晴らしさを伝えなくては」。目指すは、愛媛県今治市の今治タオルのような地域ブランドだ。

JR五泉駅近くのイタリアンレストラン「フアイブシーズンズキッチン」。12年春にオープンした店は工場見学つきのランチが人気だ。近所のニット工場「サイフク」を見学した後、レストランで旬の食材を使った食事を楽しめる。開催は不定期だが、毎回10人の定員はすぐに予約で埋まる。

レストランを運営する斉藤佳奈子社長はサイフクの常務だ。リーマン・ショックの後、アパレルからの注

文が激減。「このままでは持たない」との危機感からレストランを開き、自社商品の開発にも乗り出した。

自社開発のポンチョ「mino (ミノ)」は、長方形のニット地にスリットを入れたユニークな形が評判を呼び、全国に販路を広げた。minoを見て入社を決めた東京出身の女性もいるという。

染色に必要な水資源に恵まれた五泉は、江戸時代末期から絹織物の生産が盛んになり、戦後は洋装の普及に伴い、絹織物からニットへの転業が増えた。

だが、五泉ニット工業協同組合によると、1991年ごろに95社あった加盟企業は、14年に24社まで減った。アパレルメーカーが中国など人件費の安い海外に

製造を委託する動きが産地を直撃。91年に802億円あった生産額は、14年に115億円まで落ち込んだ。

組合は昨秋、欧州のニット産地、イタリア・フィレンツェを訪れ、現地メーカーのイル・ボルゴ社との提携を決めた。「人材育成やデザインはフィレンツェに学ぶべきものがある」と高橋正春事務局長。付加価値の高いものづくりをめざして、若手職人のイタリア留学などを検討している。

ニットに負けじと絹織物メーカーも動き出した。和服素材の白生地をつくる1900年創業の老舗、横正機業場は、染色業者や工芸家と組んで絹のストールを自主開発。洋装の製品の開発や販売を視野に入れる。